



ステップスギャラリーで個展を重ねる十河は、様々な実験を怠ることがない。今回十河は画廊「入り口」に看板のカラーージュを1点、画廊内に3枚組70点計210枚の「顔」と、146×548cmの大作を展示し、事務所に写真にカラーペンの作品を9点、「出口」に同様の作品一点を展示した。看板のカラーージュの文字を拾う。「絵はワタシのセックスだ。だからとキドキ観せモする」。圧倒される画廊内の作品よりも、事務所に展示した写真にカラーペンの作品群のほうがメインなのだ。つまり十河は、表と裏を逆転させていることになる。

すると十河の看板の主張も疑うことができる。自己の性癖をひけらかすのではなく、その裏側を探らねばなるまい。行為という主観は絵画という客体に還元される。

逆転はアンチではない。一心同体なのだ。そこから抜け出ることなく、本質を捲り上げて晒すこと。これが十河の絵画の本質となる。セックスは欲望でもあり生産でもあるのだが、もっと根源的な、解き明かされていない「生きる」という不可思議に溯ることが出来る。

十河が描く資本主義とは日本の共同体であり、日本の共同体は「世間」と呼称され、世界でも独特の雰囲気を持つ。世間に塗れ、侵犯され、逃れることが出来る日本人は存在しない。顔に描かれる奥底には、何が見えてくるのだろうか。

画廊主吉岡はブログで、十河が描いている顔は「狂気」であると評した。私は次のように評する。「描かれているのは顔ではない。虚無である」。

